1　と畜場でみられた豚の悪性黒色腫

豊橋市食肉衛生検査所　○陣内　俊　　佐々木　豊　松田　克也
細井　美博　齋藤富士雄

１．はじめに　黒色腫は犬に最も高頻度に発生し、馬、牛、豚にも多くみられるが、犬以外では大部分が良性腫瘍である。今回、当検査所において全身に転移を認めた悪性黒色腫の豚に遭遇したので報告する。

２．症例　豚：雑種、雌、６ヶ月齢、毛色茶　　健康畜として搬入されたが、腰背部に 14×6.5cm 大および背部に 2.0×2.0cm 大の皮膚腫瘤を認めた。

３．検査結果

（１）解剖所見：皮膚腫瘤の割面は黒色充実性で膨隆し、周囲との境界は明瞭であった。肝臓では外側右葉臓側面に拇指頭大、外側左葉横隔面に大豆大、方形葉基部に大豆大の黒色結節を各一箇所認めた。結節の割面は黒色充実性を呈し、周囲との境界は明瞭であった。心臓では表面に大豆大、小豆大の黒色斑を各１ヶ所、左腎では皮質に小豆大の黒色斑を１ヶ所認めた。肺では全葉にわたり針頭大から大豆大の黒色斑が密在し、胃では幽門部漿膜面に大豆大の腫瘤を１ヶ所認めた。躯幹筋では、左右大腿部の筋肉内に大豆大の黒色結節を各１ヶ所、腰部筋肉内に小豆大から大豆大の黒色斑が散在していた。また、内腸骨リンパ節、腸骨下リンパ節は著しく腫大し、黒色を呈していた。なお、神経系組織には黒色病巣を認めなかった。

（２）組織所見：黒色病巣では、腫瘍細胞が渦巻状または敷石状に増殖していた。腫瘍細胞は、大型で円形から多角形を呈し、細胞内に多量のメラニン色素顆粒を貯留しており、核は円形から三日月状など多形性を示し、大小不同を認めた。鍍銀染色では、腫瘍細胞の増殖に伴う細網線維の増生を認めた。抗 S100 タンパクポリクロナール抗体（㈱ニチレイ製）を用いた免疫組織染色（AEC 発色）では、腎臓以外の黒色病巣の細胞は全て陽性であった。

４．考察　と畜場において、転移性の黒色腫を疑う場合、黒色病巣が腫瘍組織かあるいは黒色色素の沈着したものかを鑑別する必要がある。肉眼による検査で転移病巣か否かを判断しかねる場合、黒色病巣の判定方法として、今回用いた抗 S100 タンパクによる免疫組織化学的検索を実施することが有益であると考えられた。